

ひらつか



南米のアンデス音楽に合わせて体を揺らし、手拍子をするお客さん。10月30日に紅谷町まちかど広場（紅谷町12-21）で、外国籍市民らが開いたワールドフェアでは、民族音楽を演奏したり、母国料理を販売したりして、母国の文化を広めました。

つな
な
が
る
世
界

は
じ
け
る
笑
顔

ひ
ろ
が
る
交
流

目次

1～5面…**特集** 日本と故郷の架け橋に…外国籍市民や支援する市の取り組みを紹介します。
6～7面… 募集・お知らせ
「子どもの健康」お知らせ掲示板

8面…「写真リポート」「次回納期の市税・手数料」
「フォト歳時記」「市長こらむ」
広報ひらつかのPDF版は市ウェブからご覧いただけます。
スマートフォンアプリ「マチイロ」からもご覧いただけます。



日本と故郷の架け橋に

平塚で暮らす楠木立成さんくすきのきりつせいの職場は、自宅から車で約40分ほどの厚木市の郊外にある。敷地内に並ぶのは、カンボジアへ輸出する中古バイクだ。遠くから楠木さんと呼ぶ声がした。「リアセイ」。カンボジアにいたころの名前だ。

「同僚の教師は捕まっちゃった」

カンボジアは1975年に社会主義体制に移行し、新体制になじめないなどの理由で、多くの国民が難民として国外に脱出した。首都プノンペンで中学校の教師をしていた楠木さんもその一人。1990年、電車や自動車を取り継ぎ、3日間掛けて隣国タイへ渡った。兄は米国、弟はフランスへ亡命。そして、楠木さんは妻と3人の娘をカンボジアに残し、日本へ――。

「同じアジアの国で親しみもあるし、何より安全」。同年、タイの難民キャンプを経て、東京都品川区にあった国際救援センターを訪れた。

カンボジアにいた当時は日本語に触れたことはなかった。同センターで半年間、簡単な日本語と習慣を教わったが、仕事をするには不十分だと感じた。日常生活に苦労しないためにも、学校に行きたいと申し出た。しかし、職員から返ってきた言葉は期待を裏切るものだった。「あなたたちは勉強するのではなく、働かなくてはなりません」。その言葉に肩を落とした。

慣れない日本の生活

1991年、同センターの紹介で横浜市にある自動車部



「日本で働いていくためにはもっと知識が必要」と楠木さん

品工場に就職した。日本語のコミュニケーションは難しく、工場内の作業はとても暑い。言葉の違い、職場環境の変化、慣れない寮生活……。戸惑いは大きかった。「カンボジアに比べて、日本の生活は快適でしょ?」。同僚の言葉に困惑しながら笑顔返すしかなかった。

「仕事や生活するためにはしっかりとした教育を受けるべきだ」。通学への思いは捨てきれず、働きながら横浜市にある定時制高校に4年間通った。大学受験も考えたが、生活のためには仕事を優先しなくてはならない。大学受験は断念せざるを得なかった。

休日には平塚に住むカンボジア人の友人の家を訪れた。友人と他愛もない話をする時間は、寂しさを忘れる唯一のひと時。田んぼや畑がある平

支えてくれた家族

「平塚に引っ越して来いよ」1995年、友人の紹介で平塚市内の会社に転職したのを機に、平塚に移り住んだ。カンボジアに残っていた家族も日本に呼び寄せ、再び取り戻した幸せな時間。子どもたちの成長、妻が作るカンボジア料理……。その後、長男が生まれ、2005年には一家で日本国籍を取得。充実した日々を過ごしていた。

ところが、2008年に起きたリーマンショックの影響から、2011年に会社をリストラされることに。カンボジア人の友人たちも職を失った。失意の中、前を向く意欲をかき立てたのは家族の存、



海外にいる母や兄弟も集まり夕食にカンボジア料理を囲む。楠木さん(写真左から3番目)にとって心が休まるひと時

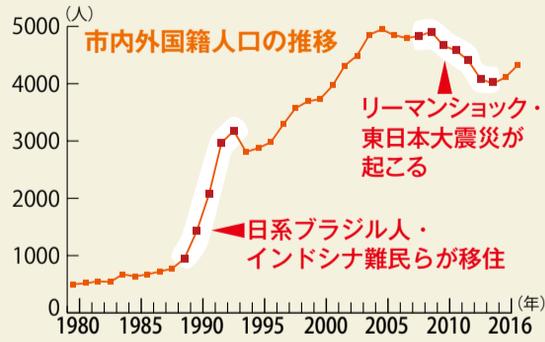
90年代前半に急増した外国籍市民

市内には2016年9月末時点で70カ国、4,382人の外国籍市民が暮らす。1980年には502人だった外国籍市民は1990年代前半に入ると急激に増えていった。

増加の要因は主に二つ。一つは、バブル期の好景気で多くの日本人が大企業に就職したことによる、単純労働者の減少だ。この穴を埋めたのが、日本語が話せる日系ブラジル人だった。自動車工場が多い平塚に多くの日系人が移り住んだ。

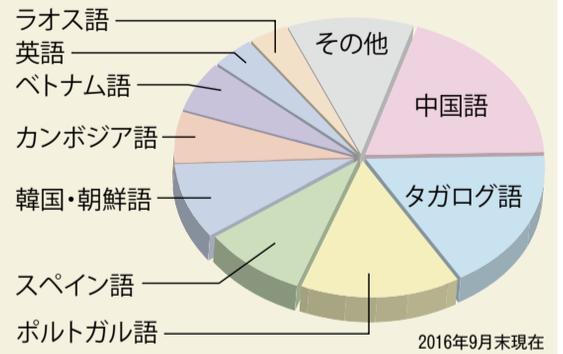
もう一つの要因は、インドシナ難民の定住だ。1975年にベトナム戦争が終結。ベトナム・ラオス・カンボジアのインドシナ3国では、新政治体制が発足し、体制になじめない多くの方が国外へ脱出した。大和市にあった大和定住促進センターは多くのインドシナ難民を受け入れた。その後、インドシナ難民の一部

は、平塚市横内にある県営住宅に入居した。外国籍市民は少しずつ増え、2004年6月には5,066人にまで増えた。しかし、2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災の影響で多くの外国籍市民が帰国した。現在は最盛期と比べると約13.5%減少、ブラジル人は約半数にまで減っている。



上位4言語が約60%を占める

外国籍市民を言語別で見ると中国語が19.3%と最も多い。続いてフィリピンのタガログ語が17.3%、ブラジルのポルトガル語が14.5%、ボリビアなどのスペイン語が9.1%と続く。英語を公用語とする市民は14カ国と多いが、全体の割合はわずか3.8%にとどまる。



誰にとっても暮らしやすいまちに

「『中野さんって外国籍市民の知り合いが多くて、どこの国の人だか分からないね』って言われます」。市通訳・翻訳ボランティアバンクのコーディネーターを務める中野恵子さんはほほ笑む。

1999年に発足した同ボランティアバンク、通称「SWING」は、市役所の外国籍市民相談での通訳や公的機関が発行する情報などの翻訳をしている。現在は日本語が堪能な外国籍市民や外国語を話す日本人ら、8言語57人がボランティアとして登録している。

中野さんは1992年に、今も続く日本語教室(5面囲み)の土台となる教室を開くなど外国籍市民を支援してきた。「当時は騒音やごみの出し方など外国籍市民と地元住民の間にはトラブル続きでした」。互いの話し合いには、中野さんも同席して理解を求めた。「外国籍の方が『住んでよかった』と思えるまちは、きっとさまざまな文化・習慣・立場の違いにお互いが心を配れる多文化共生のまちなのではないのでしょうか」と力を込める。



イベントで司会をする中野さん



通訳も務める楠木さん

「もっと仕事に生かせる技術を身につけよう」。その思いから通訳始めた、秦野市にある県立西部総合職業技術校の自動車整備コース。勉強をしながら給料をもらえる、望んだ環境だった。自分より20歳以上も離れた若者らと一緒に学ぶ毎日。自動車整備士の資格をはじめ、2年間で、およそ15の資格を取得した。し

これからは支える立場に

かし、卒業が近づく中、内定は決まらない。50歳を超える自分を雇ってくれる会社はどこにもなかった。

「仕事が決まらないなら自分で立ち上げるしかない」

会社設立には、土地や資金など多くの問題があった。それでも日本でも出会った学校の先生らの助けもあって、2013年に「新富士商事」を厚木市に設立。資格を生かし、カンボジアで人気のある、バイクなどの日本製品を修理して輸出する。「休みはほとんどない。でも自分よりも大変な外国籍の方はもっといる」。仕事の傍ら、2年前から始めた平塚市通訳・翻訳ボランティアバンクの活動。手続き



「平塚の暮らしは日本文化に吸い込まれるようで楽しい」とライラさん

「子どものころから漢字など、日本の文化に興味がありました。来日して高性能な機械を見てからは、ロボットに興味を持ちました」と目を輝かせるのは東海大学工学部2年生のライラさん。

母国と日本の家族

「Today first announcement about national pension (今日最初のお知らせは国民年金についてです)」。マイクに向かって滑らかな英語を話すライラさん。毎週火曜日から午後7時にFM湘南ナパサで放

日本の学生生活は毎日が新鮮

が必要な外国籍市民のために、市からの依頼で通訳をしている。また、在日カンボジアコミュニティの副理事長として、2000人以上のカンボジア人技能実習生らを支援。不当労働などの問題には、企業との仲介のために全国を駆け回っている。「助けがないと生きていけない」。日本の生活に苦勞する技能実習生の

姿に、来日した当時の自分を重ねる。「平塚は第2のふるさと。カンボジアでもっと平塚のいいところを広めたい」。11月5日・6日にはカンボジアのプノンペンで初めて七夕まつりが開かれた。モチーフとなったのは平塚の七夕まつり。実行委員会の副会長を務めた楠木さんは、日本とカンボジア

東海大学 ライラ・アルカールさん

のパイ役として尽力した。難民として日本に移り住んで26年間、日本で働き、子どもを育て、生活する姿は、日本人と何ら変わらない。「来日してからボランティアや学校の先生に支えられた。でも今は自分が支える立場になっている」。これからも、日本人と外国籍の方が共存できるように貢献していく。

「教授は時々『分かる?』と聞いてくれますが、分からなくても恥ずかしくて『分かる』と答えちゃいます」とはにかむ。自宅に帰ると、分からない日本語を英語に翻訳して勉強している。

「子どもは、サウジアラビアから留学したライラさん。日本語を学びながら、ロボット工学を学べる大学を探した。2015年、市内にキャンパスのある東海大学に入学し、現在は精密工学などを学んでいる。」

講義では専門用語も多く、理解できない言葉も多いという。

「送る『インタナショナル・ナパサ』では、市通訳・翻訳ボランティアバンクの方々が、市内の地域情報を7言語で発信している。ライラさんは、今年4月から英語を担当する。『スタジオではいろんな国の人が集まって、それぞれの言葉で話しています。でもみんな家族みたいで、会えることがうれしい』とほほ笑む。

「サウジアラビアに帰ったとき、日常会話で日本語が出てきたり、あいつのときにお辞儀をしてしまったりします。ときどき自分が日本人のような気がします」と笑顔のライラさん。卒業後は日本で就職し、学んだ技術で家族を助けたいと話す。「忙しそうにするお母さんを助けるために、家事を手伝うロボットを作りたいです」と家族を思いやる。

芽生える共生の意識

横内小学校(横内2687)

「ワンワン！ 犬はどれかな？」
「はい！ これ！」

漢字が書かれたカルタを勢いよく手ではじく児童。元気の国旗や民芸品で彩られて、少し見慣れない風景だ。

横内小学校では、外国籍や日本国籍取得者の児童に、漢字や算数などを教える国際教室を開いている。「日常会話ができる子どもも、学習言語となると理解することは簡単ではありません。言葉は理解できていないようで、できていない部分も多くあります」と国際教室の専任教諭、土居たかね先生は話す。家庭で使わな

い言葉や熟語、文章問題など、外国籍児童には高い「言葉の壁」がある。

51人の児童が通う国際教室は、1〜4人程度の班に分かれて週1〜6時間、個人の学習の進み具合に合わせて勉強する。3人の専任教諭の他に、外国語を話せる6人の日本語指導協力員が、月に1〜4回、派遣されている。

「日本語を話せない保護者の中には、子どもにも外国語を学んでほしいという方も多くいます」。外国語を話せる教員らは、それぞれが担当している外国語を交えながら教えている。また、各家庭に届ける行

将来の受験には漢字の学習が大事



事などの便りは、6言語に翻訳して配っている。「土曜日参観などの行事は保護者に伝わらないこともあります。でも私たち教員だけでなく、子どもたちが親に教えているんです」とほほ笑む。

個性を尊重して

同小学校では、各国の児童らの集会など行事を開いて、母国の文化に親しみを持つ機

会をつくっている。

年に1度の国際交流週間では、外国にルーツのある児童らが、母国紹介のビデオを制作して給食時に流したり、全校児童で、外国の遊びをしたりしている。紹介ビデオでは、民話の劇や読み聞かせ、クイズなど、それぞれが趣向を凝らして各国の文化を伝えている。「集会が終わった後、日本育ちの外国に

つながりがある子どもが「自分の生まれた国に行ってみいな」と話していました。外国に興味を持つ子どももいてうれいすね」と土居先生は笑顔を見せる。

同小学校では、全校児童数の約20割にあたる児童が外国につながる。「外国にルーツのある児童が、市内で最も多く在学しています。子どもたちには当たり前環境なんです」と話す土居先生。「日本人の子どもからも『毎日、校内放送で外国語のあいさつしてみたら、みんな覚えられるんじゃない？』という提案がありました。みんな自然に共生する意識が芽生えているんですね」とほほ笑む。

外国籍児童らは学年が上がるにつれて、家庭での母国料理や、親に勉強を教えることも出来ない不満が出てくることもあるという。「まだまだ問題が

あります。でも子どもたちは当たり前のように日本になじみ、学校生活を送っています。国籍で見るとはなくて、一

実習生の活力が刺激に

株式会社タシロ(入野284-1)

板金加工などをするタシロは、5人の中国人技能実習生を受け入れている。技能実習生や受け入れる企業を支援するJITCO(国際研修協力機構)を利用して、2006年から延べ30人の技能実習生を受け入れてきた。「働き出した当初は、日本語のコミュニケーションに苦労しますが、みんな20歳代前半と若く、のみ込みが早いすね」と田城裕司社長は話す。

技能実習生の中には、母国の徴兵制で厳しい環境を経験したという方も。「過酷な環境を経験した技能実習生は、忍耐力や行動力が高い傾向にあります。彼らの仕事ぶりは日本人の社員にもいい刺激になりますよ」と田城社長。

母国で生かす日本の技術

技能実習制度は、長時間労働や賃金不払いなど、人権問題に発展するケースも少なくない。

タシロは海外に事業所を持つ日本企業と連携。3年間の研修を終えて、母国に帰国し

人の人間として見ることが大事なんだと、みんなが自然に気付けてくれるでしょう」と期待を込める。

「初めて受け入れた研修生は、現在は中国でリーダーとして活躍しています。日本語も話せるので、パイプ役として頑張っていますよ」とほほ

た技能実習生の就職にもつながっている。



丁寧に板金に穴を開けるリョウさん

笑む。

タシロで研修を始めて2年目になる中国出身のリョウ・イイさん。来日する前に3か月間、日本語を学んだが、当初はうまく伝わらず、戸惑ったという。「日本人の先輩はとても親切に教えてくれます。今は不自由なく生活できています」とリョウさん。「日本の方は製品をとんでも厳しく検査します。中国にはない、良いところですよ」と、将来は研修で学んだ製品検査などの知識を生かした仕事に就きたいと意気込む。

田城社長は勉強熱心な実習生の姿に驚かされると。「彼らは働く意欲が強過ぎるので、少し休んだらと、心配になることがあります。現代の日本は仕事の面で恵まれています。今働けていることが当たり前じゃないんだと気付かせてくれます」と熱を込める。

世界共通の笑顔の源

肉のユーダイ(横内3785-4)

「今日は豚バラが安いですよ。いかがですか?」

「じゃあ100グラムください」
横内にある精肉店「肉のユーダイ」。おいしそうな和牛やソーセージなどが並ぶ店内は、店員とお客さんの会話が響くアットホームな雰囲気。しかし、並ぶ商品の中には珍しいものも……。

「見てください。これ何だと思いませんか?。代表の佐藤聡一さんが取り出したのは約2粒もある冷凍されたアヒル。その他にも内臓や外国語で記された調味料など、バラエティーに富んだ商品が並

ぶ。「外国籍のお客さんのご要望で少しずつ増えていき、今では300品目にもなりました」。他の店舗で取り扱っていない品々が並ぶ理由は、お店を構える横内地区の客層にある。

1977年に創業した同店。創業当初は精肉などしか置いていないお店だった。しかし、1980年代前半から横内に外国籍市民が増えた影響で、取扱品目も増えていった。「母国の料理を作りたくても、お肉も調味料も、どこのお店にも置いてないの」というお客さんの声があったんです。「じゃあうちが何とか、



「いい出を忘れないでほしいです」と土居先生(写真左から2番目)

共生

多文化共生社会を築くにはそれぞれの文化が世界が広がっている。

やさしい日本語を活用して



「簡単な単語で」と坂内さん

「外国籍の方が分かるように話すことは、窮屈なことかもしれませんが、短い文でゆっくり話すことが大切です」と話すのは県立国際言語文化アカデミアの坂内泰子さん。9月に市職員を対象に開いた研修では『やさしい日本語で伝える』をテーマに講師を務めた。「外国籍の方はいざ定住しようとしても、制度を学ぶ場がありません。公共機関の窓口などで、制度が理解できないと『自分は何も分からない』という感覚に陥る方もいます」と坂内さんは危惧する。

外国籍の方が平塚に来た背景は情勢不安定・出稼ぎ・結婚・留学など。近年では技能実習生も増えている。多くの国で公用語として使われる英語を、母国語とする外国籍市民の割合は、およそ4割にとどまる(3面上グラフ)。「英語が伝わらない外国籍市民がほとんどです。ならば日本語で上手く伝えるすべを身に付けなくてはなりません」と訴える坂内さん。「国籍関係なく、のびのびと生活できるように支援していきたいですね」と期待を込める。

日本語を学びながら情報共有

市国際交流協会が開く日本語教室には、毎回5~10人程度、技能実習生や主婦らが通う。「子どもに勉強を教えたい」「日本のゲームや漫画を理解したい」と通う理由もさまざま。「皆さん共通していることは真面目で、勉強熱心です。自転車で40分かけて通う方もいるくらいですよ」と話すのは同協会の会員で、講師を務める菅原由美子さん。

菅原さんをはじめ、外国語を話せる講師も多いが、教室では日本語でイラストを交えながら教えている。「日本語で教えることが何より早く覚えられますからね」と力を込める。

今年1月に夫の仕事の都合で中国から引っ越したオウ・ブンさんは、教室に通って半年がたつ。「教室で学んでから、買い物も1人でできるようになりました」と喜ぶオウさん。「言葉だけではなく、文化や生活も勉強できるし、いろんな国の友達もできました」と笑顔を見せる。

通う外国籍の方にとって、同教室は情報共有の場所でもある。菅原



「日本の文化も学べる」と話すオウさん(写真左)

さんは「病院などの手続きや携帯電話の請求など、日常生活の相談事を受けることもあります。みんなで助け合って解決できる相談もあるので、もっと私たちに頼ってほしいですね」とほほ笑む。

日本語教室 場所は松原分庁舎(天沼7-8)や市民活動センター(八重咲町3-3JAビルかながわ2階)です。日程など、詳しくは市ウェブをご覧ください。

生活をサポート

外国版市民生活ガイドブック 平塚のまちの情報や受けられるサービスを8言語に翻訳し、本館1階の市民課などにあります。

ラジオ(FM湘南ナバサ78.3MHz) ①インタナショナル・ナバサ 7言語で地域情報を発信しています。毎週火曜日、午後7時~8時②防災インフォメーション多言語放送 5言語で防災情報を発信しています。毎週月~金曜日、午後5時40分ごろ~5時45分。

外国籍市民相談 スペイン語は火曜日。ポルトガル語は水曜日。時間は午前9時~正午・午後1時~4時。本館5階の市民情報・相談課。**通訳・翻訳** 市役所の依頼で、窓口相談の通訳をしたり、通知書などの翻訳をしたりします。

☎文化・交流課 ☎25-2520

みんなで楽しもうかい

世界の料理紹介や音楽、民族衣装のファッションショーなどを楽しみながら、お互いの国の文化を理解し、交流・親睦を深めましょう。
12月11日(日)午後1時~4時。青少年会館(浅間町12-41)。200人(先着順)。中学生以上1,000円・小学生500円。
☎直接、11月21日(月)から、松原分庁舎1階の文化・交流課 ☎25-2520へ。参加費と引き換えに前売り券をお渡しします。



「これからも大変なこともありますが、国際教室で過ごした思

地域多文化

異なる文化を認め合
対等の関係で生活でき
目指す平塚市。地域の
集まり、小さな世界



市外からも多くの常連客が訪れる

「しまししょう」と仕入れるようになったっていきました」と佐藤さんは力を込める。

同店で販売されている牛の胃袋「ハチノス」もお客さんか

らに要望で仕入れるようになった商品。日本人にはなじみがなかったが、ブラジルでは家庭料理「トリッパ」という煮込み料理の食材として好まれている。今では、日本人のお客さんも焼き肉の食材として好んで買っていくという。「外国籍の方はスープ一つにしても牛肉の骨から作り出す。お肉を上手に使い切る調理

さまざまな要望に対応

「外国籍の方は親族のつな

がりを大事にしている、子どもの誕生日には親戚が集まってパーティーをします。その度に家族で来店して、たくさんのお肉を買っていきますね」。伊勢原市から3人の子どもを連れ、来店したりユウさん夫婦は、ベトナムから6年前に日本に移り住んだ。「ここは安くて、いろんな食材もあって、それにおいしいです」と笑顔。一週間分のお肉が入った大きな袋を手に、お店を後にした。

「ハラルマークがついた食材はイスラム法上、食べることを許された食材のこと。イスラム教は、豚肉などを食べることを禁じ、牛や鶏も家畜の餌や屠畜で厳密なルールを守っていないと食べることはできない。「多様なお肉を仕入れて、多くの方の需要に応えられるように準備しています」と胸を張る佐藤さん。「お客さんは探しているお肉が見つかったときに『こんな近くに売っていたんだ』とうれしそうな顔をします。その笑顔を見ることが私の喜びでもありますね」とほほ笑む。

